暮らしの安心をめざして！

現在、全国的にも勤務医の減少による医師不足が懸念され、地域医療の崩壊が危惧されています。頻度の違いはあるものの、都市や地方に限らず「いざという時」に、安心して診療を受けることのできる救急医療体制は必要だと思います。

愛南町では、住民の皆様に安心して医療サービスを提供するため、6月1日から国保一本松病院の外科医、麻酔科医を募集しています。給与面や勤務体制等、多くの問題が山積し、医師確保は厳しい状況ですが、愛媛県等の関係機関に協力を求めながら、粘り強く医師確保に努めていきたいと思います。

今号の特集では「どういう体制を整備すれば、医師が来てくれるのか」など、医師をめざす愛媛大学医学部の学生3名と谷口町長が、9月4日に松山市内で対談しましたので、その主な内容についてお知らせします。

（町長） 現在、愛南町では、国保一本松病院の外科医、麻酔科医を募集していますが、地域医療を担うであろう、医師をめざす皆さんと対談できることをとてもうれしく思います。

本日は、急病や事故など、「いざという時」でも、安心して診療を受けることができる救急医療を含む医療体制を構築するため、町として「どのような方策が必要なのか」という点について、皆さんと語り合いたいと思っています。また、3名のうち、二人は愛南町出身、一人は宇和島市津島町の出身ということで、同じ南予人同志、気軽に意見を述べてほしいと思います。どうか、よろしくお願いします。それでは、始めに自己紹介をしていただき、対談をスタートさせたいと思います。

浪口さんからお願いします。

（浪口） 私は柏崎出身の浪口謙治（けんじ）です。愛媛大学医学部医学科の3回生です。大学には、宇和島東高校から地域医療枠の推薦で入学しましたので、地域での実習にはよく参加しています。今日は、よろしくお願いし

ます。

（常盤） 私は宇和島市津島町出身の常盤大樹（ひろき）です。愛媛大学医学部医学科の3回生です。私も、最終的には、地域医療に携わりたいと考えていますので、地域の思いや実情を学んでいきたいと思います。

（田原） 私は一本松地域の広見地区出身の田原壮一朗（そういちろう）です。愛媛大学医学部医学科の1回生です。今年の3月に南宇和高校を卒業し、4月に入学したばかりです。よろしくお願いします。

（町長） 皆さんも、全国的な医師不足については、新聞等でご承知のことと思います。私たち愛南町の中核病院である県立南宇和病院でも、外科医が1名ということで、他科との連携を含め、医師自身の能力が十分に発揮できないという現状があるようです。また、常勤の麻酔科医がいないということで、事故等の救急医療に対応できない場合も考えられ、いざという時などを考えると、とても深刻な状況だと認識しています。

そのため、県知事や県の担当部局へ、機会あるごとに要望しています。県としても、県立南宇和病院への医師派遣等、その確保に苦慮しながらも、最善を尽くしてくれています。私は、医師の方も大変でしょうが、患者さんにとっても、馴れた先生がすぐに代わってしまうということで、安心して治療を受けることができない。こんな現状を何とかしたいと思っています。

そんな思いから、現在、町独自で町立国保一本松病院の外科医、麻酔科医を募集しています。募集の内容としては、主に国保一本松病院に勤務していただきながら、県立南宇和病院へも応援に行っていただくという体制を考えています。愛媛県も、この募集事業を応援してくれていますし、今日も県庁で会議の後、救急医療担当の県職員が、知り合いの医師と面談をしてくれました。私としても、関係機関の協力をいただきながら、根気強く医師確保に努めていきたいと考えています。

最初に、医大では、何回生の時に診療科の専攻を決めるんですか。

（浪口） 具体的に決めないといけない時期は、卒業までの4年と2年間の初期臨床研修医制度が終わるまでに決めないといけません。その後、専門の診療科に入ることになると思います。

自分としては、外科か内科にいきたいなと考えています。

（町長） そうですか。一般の大学に比べると、約3倍の時間があるんですね。常盤さんは、どうですか。

（常盤） 私も、外科か内科に進みたいと思っていますが、研修医になってから決めていきたいと思っています。

（田原） まだ、勉強することが多くて分かりませんが、外科か内科がいいなあと思っています。何時になるか分かりませんが、地元に帰って開業したいと思っています。

（町長） そうですか、是非、がんばってください。田原さんは、開業医をめざしたいと言われましたが、浪口さんは、開業医か勤務医、どちらになりたい

と思われていますか。

（浪口）まだ、そういうことは考えたことはありませんが、兄が眼科で働いているので、開業するのもあり得るのかなと思っています。

医者は、将来的には、勤務医で努力して教授や研究者になるか、開業医になるか、このどちらかの道を選ばなくてはいけないと思っています。ですから、兄とも相談することがありますが、将来的には、開業医の道に進むことになるかもしれません。

（常盤）私も、将来的には、宇和島辺りで開業できればいいなあと考えています。

（町長）そうですか。今、愛南町や愛媛県で問題になっているのは、勤務医の数が足りないということです。愛南町でも、勤務医の先生からは「医師の数が足りず、昼夜を問わずといった勤務状態だ」ということが言われていますし、開業医の先生からは「救急でもないのに、タクシー代わりに救急車を利用するコンビニ受診が多くなっている」ということが言われています。やはり、救急車の不適正な利用が、医師の負担にもなり、医師不足の要因の一つになっていると言えるかもしれません。そのため、住民の皆様にも、かかりつけ医を持っていただき、救急車を利用すべきかどうかの判断を仰ぐなど、救急車の正しい利用について周知していく必要もあると思っています。

まだ、皆さんが、開業するまでには、かなりの時間があると思いますが、仮に、勤務医となる場合、どういう勤務状態、収入の病院だったら、行ってみようと思われますか。

（常盤）やはり、収入よりは、多くの経験ができることの方が、私にとっては重要です。自分の描いた医師としての将来像に向け、症例を学んでいくことができる病院に行きたいと思っています。

（浪口）今は、向学心しかないので、給料や待遇面よりは、医者としての技術を高めることが目標です。やはり、第一線で働きたいという思いがあるので、へき地よりも都市部の方が魅力的です。

（田原）将来的には、開業したいという思いがありますが、開業すれば、自分で責任を負わないといけないので、今は医者としての腕を磨ける環境があるかどうかの方が、私には重要です。

（町長）そうですか。やはり、今の皆さんにとっては、金銭的な問題ではなく、医者として技術を高めることが重要なんですね。

もう一つ、皆さんの勉強のこ

谷口長治町長

浪口謙治さん

とでお聞きしたいと思います。地域で勤務医となる場合、2週間のうち何回か、研修に行く時間を確保してほしいということがあると思いますが、その点について、どのような考えを持っていますか。

（浪口） 先輩からは、一週間に1回くらいは必要だという話を聞きました。また、研修も多い方がいいと思います。

（常盤） 私も、どれくらい必要なのかは分かりません。やはり、愛大のように疑問に感じることを相談できる環境が地域にはないと思うので、研修制度は必要だと思います。

（町長） 分かりました。それでは、愛媛県の奨学金制度を利用している方もおられますが、どうですか。

（常盤） 授業料や生活費など、金銭的には他の奨学金制度よりもいいと思いますし、とても助かっています。

（浪口） この制度は、研修医が終わって県立病院に勤務しながら、地域の診療所等に行かないと、奨学金の返納が免除されません。学生には、専門の診療科を学びたいという思いが強くあると思うので、償還期間をもっと長くしてほしいと思います。

（町長） もし、愛媛県のような医学生に対する奨学金制度を愛南町で実施する場合、利用される学生の方にとっては、償還期間を長くした方が魅力的だということですね。また、すぐに「勤務医にならないといけない」というのではなく、もっと勉強する時間を与えてほしいということですか。

（田原） そう思います。例えば、時間はかかりますが、研修医を終えて、10年以内に愛南町で勤務医になればいいという制度だとうれしいと思います。

（町長） 将来的にも、今のように医者の偏在が続くでしょうか。

（浪口） 地域医療の状況は変わらないと思いますし、良くなるよりも悪くなることの方が多いのではと考えています。私たち医学生にとって、奨学金制度がどうかというよりも、医師としての医療技術をどう高めていくかということの方が大切だと感じています。

（田原） 私も、社会資本整備が進み、都市と地方の移動時間や距離が短縮されると、病院等の様々な施設が集約され、ますます地方には厳しい状況になるのではと感じています。

（町長） そうですか。愛南町の人口規模では、都市部に比べて多くの症例を学ぶことはできにくいでしょうから、一週間のうち何日かは近隣の市立宇和島病院で勤務していただくということも考えていく必要がありますね。

常盤大樹（ひろき）さん

田原壮一朗（そういちろう）さん

また、愛南町の医師募集の対象者は、皆さんよりも高い年齢層の方で、多くの経験を積まれた医師が、私たちのターゲットということですね。

（常盤） そう思います。

（町長） ありがとうございました。今日の対談を終えて、皆さんの医学に対する真摯な考え方を伺うことができ、とても貴重な一時を過ごすことができました。

今後とも、医療技術の向上もさることながら、地域医療にも眼を向けていただき、患者さんとの絆がもてる医師になってください。

本日は、本当にありがとうございました。

愛媛大学医学部1回生
田原壮一朗さん

愛媛大学医学部3回生
浪口謙治さん

谷口長治町長

愛媛大学医学部3回生
常盤大樹さん

救急医療機関の役割とは

今日の救急医療は、傷病者の状況や程度に応じて、一次から三次の救急医療機関に区分され、それぞれの医療機関が担う機能や役割が定められています。

休日・夜間に診療が必要になったら、救急車が必要な場合を除いて、まずは在宅救急当番医に受診又は相談をしてください。また、救急車が必要な時は迷わず、すぐに「119」へ連絡をしてください。なお、それぞれの救急医療機関の機能については、以下のとおりです。

症状が軽い場合

●一次救急医療機関

かかりつけ医、在宅当番医(国保一本松病院、内海診療所、町内の個人病院など)
入院治療の必要がなく、比較的軽症の患者の治療を行う医療機関です。

症状が重い場合

●二次救急医療機関

県立南宇和病院、県立幡多けんみん病院など、主として、入院や手術が必要な重症救急患者の治療を行う医療機関です。

●三次救急医療機関

市立宇和島病院など、非常に症状が重い救急患者の救命治療を行うために必要な高度診療機能を有する医療機関です。

本町の救急車の出動状況は・・・

平成19年中における救急車出動件数は、1,030件、搬送人員1,000名でした。そのうちの93.1%、931名の患者を県立南宇和病院が受入れています。

県立南宇和病院では、昨年の4月と今年の4月を比べると、常勤の医師が4名減り、現在13名の常勤医師と県立中央病院からの派遣医師によって、診療がなされています。また、平成20年4月以降、麻酔科医の派遣が週100時間(県立中央病院から派遣)から、週24時間(火、水、金曜日に市立宇和島病院から派遣)に縮小されています。

本町で唯一の総合機能を有した県立南宇和病院の状況に、どれだけの方が危機感を抱かれているでしょう。救急医療だけではなく、日常の医療においても、医師不足による勤務医の負担が懸念されます。

今後、持続可能な医療体制を守るため、県立南宇和病院をはじめ医師会、町、住民がどのように連携していくことが必要なのか、紙面の中で継続して掲載していきたいと思います。

地域医療機関のネットワークを活かして

国保一本松病院長　米山 孝

当院は、平成13年から3名の医師が60床を担当する、療養型病院として現在に到っています。幸い、近くに県立南宇和病院があり、急性期の患者・重症患者は県立南宇和病院が、慢性期の患者は当院で、と、入院・療養の機能分担がなされています。

現在、県立南宇和病院の医師不足を支援するため、当院の岸田先生が、月2回の当直と、毎週木曜日に内視鏡検査を県立南宇和病院で担当されています。今後、更に県立南宇和病院や地域医療機関との適切な機能分担と密接な連携を通じて、町民の皆さんに信頼される医療サービスを提供していきたいと思います。